

ことばに関する四著

磯貝英夫

私が、ここで関連的にとりあげたいと思うのは、山本正秀『近代文体発生の史的的研究』（岩波書店）・吉本隆明『言語にとつて美とはなにか』第一巻・第二巻（勁草書房）・中村光夫『言葉の芸術』（講談社）・寺田透『近代日本のことばと詩』（思潮社）の四著作である。いずれも、昨年度に上梓されて、私の文学的関心の上に興味ぶかかった、言語考察の書、あるいは言語考察をふくんだ書物である。もちろん、この四著は、それぞれ性格を異にしていて、一律に論ずるにはかならずしもふさわしい対象ではない。けれども、いずれも、ことば、特に近代日本のことばに対して、それぞれのかたちでメスを入れていて、読者は、関連的に多くの感想を誘発されるをえず、そこにまた格別のおもしろさがあるのである。

山本正秀『近代文体発生の史的的研究』は、

長いあいだ待望された書物である。幕末から明治二三年にいたる言文一致運動の歴史は、ここではじめて包括的に叙述され、その全容をあらわした。長年にわたる、うずもれた資料の博搜と整理の努力には、心から敬意を表したい。本書の着筆から脱稿までに一〇年余を要したというが、著者の努力は、もちろんそれだけのものではない。

著者は、それらの膨大な資料をできるだけ広く引用し、ていねいに紹介しつつ、評価を加え、史的に位置づけ、大きな展望をつくるというかたちで、本書を構築している。その結果、この書物は、そのまま、言文一致百科辞典というおもむきのものになっている。私たちは、言文一致関係の主張と実践のほとんどを、直接、本書においてたしかめることができる。原資料を直接手にすることがかなりむずかしい今日において、資料の引用と紹介

に懇切なこの配慮は、たいへんありがたいものである。近代日本語の史的研究の重要な資料の礎石がここに築かれたわけで、このことの便益は、はかり知れない。今後のすべての研究はここから出発することになるだろう。

さまざまのゆれを示しつつ、やがて言文一致が本格化する明治二三年以降の、この著者による整理が、また待望されるわけだが、近代文学関係者としてこの労作に感謝をささげつつ、しかし、その一面に、ある種の不満がなくもない。それは、「あとがき」に、「勝手な私見や即断はできるだけ控える方針で執筆した。」と書かれ、その点、著者自身も「あきたりない」と述べられているところにかかわっている。これは、こういう種類の著述には当然の、また必要なかまえと言つてよいものだろうが、気になるのは、こういうひかえめと手を組んでいる批評意識の単一性である。

ここでは、ほとんど倫理的でもある、言文一致の絶対賛仰を前提として、今日的な言文一致との距離、あるいは言文一致肯定の度合に応じて、すべての文と論は価値づけられているが、その結果として、言文一致への多くのためらい、それに由来するじごく道は、

すべて、無意味な頭迷きの所産とだけ言い消してしまつていいだらうかといった疑問が、全体的な首肯のなかにもつよくおこつてくる。

たとえば、二三年の、鷗外の「言文論」に結晶するような、言と文とはちがう、西歐でもちがうのだ、といった多くの言説など、次元のちがう、とるに足らぬ論議として退けられるのだが、次元はちがうにせよ、あそこにはやはり重要な問題があるのだと思われてくる。敬体ではない常態の採用に、文の客観性獲得を考へるのは正確だが、「である」という「非言」の採用による言文一致の安定を解釈するには、言と文とを区別する論理があらためて必要になつてくるのではないかと思われてくる。

『中央公論』に、審美的な文語贅を書いた丸谷才一などは問わず、ここで、のちにとりあげる、中村光夫の、「風呂の水と」一緒に赤兎を流」してしまつたとする言文一致観、また、寺田透の、今日の一一般感覚とは反対に、言を文の桎梏と見なす露伴の見解（「文章及言語の向上」大3）を一理あるものとする考へかたなどが、対照的にうかびあがつてくる。

問題は決して単純ではない。総じて、言文

一致への抵抗心情に対する問題的分け入り、また、言文一致の得と失への目くばりといったものがあつたら、この叙述はさらに立体化したにちがいないと思われるのだが、これは、労作に対する望蜀の言である。さらに、言文一致のなかでも、たとえば、美妙と四迷の言文一致は、自覚の程度にはとどまらぬ、本質的な差異・対立を持つていふといつたことが、文学的に、興味ぶかく観察されるのだが、そうした切りこみは、この貴重な資料大成・包括展望の上に、各論者が種々の角度からこころみるべき性質のものであろう。

吉本隆明『言語にとって美とはなにか』は、山本正秀の史証的労作とはがらりと變つた理論的な労作である。これは、個性的独自の粹を破つて、「文学は言語の芸術だ」という、だれも認めざるをえない地点からのみ出發して、理論の「対象的客観性」を求めようという、多くの文学理論家や研究者がしばしば抱いてきたゆめに果敢にいどんだ野心的論策なのである。

言語本質論から始めて、日本の文学史を表現史としてあとづけようとする大きな構想の

全体に創意があふれているが、それだけに、ほとんど頁ごとに、さまざまな疑問と異論が誘発される。だが、それは、この書物のあざやかな個性が強いもので、強い異論をよびさますような書物は、それ自体名著と言つてよいのである。

著者は、自己表出と指示表出との二重性の上に言語の本質を考へる。なかでも重視するのは自己表出性であり、文学は、「言語の表現を自己表出の面で強化した」ものと考へられる。そして、文学の自律的・必然的な歴史は、自己表出としての言語の表現史という抽出によつてのみ可能になるとされる。

こういう著者は、指示表出を軸として文学を考へる、マルクス主義系の文学理論に対して、徹底的に闘争の姿勢をとる。そこには、かつて「プロレタリア文学理論の延長線に彷徨し」、その線に多くの敵を持つ著者の、はげしい怨恨がうずまいてゐる。吉本個人の歴史を知らぬ者にはおそらく不可解なパトスが、論理のバランスをくずしてまで、いわゆる進歩文学理論に対して激発する。

ここで、私は、つぎのようなことを考へる。かつて、サルトルが、想像をあやまれる知覚とし、想像の不安を匡正するところに芸

術を考えたアランの芸術論を否定し、想像力の獨立性と優位性を明かにして、その延長線で、芸術の現実からの超越性を主張したとき、たしかに芸術のある特質をみごとに指示しえたのだったが、やがて、その論理をしてさらに現実・歴史をくぐらせざるをえなくなり、そういうかたちで、いわばアラン流論理がたちかえってきた、ああいう過程が、背景はもろろんずいぶんちがうが、ここにもおこる可能性があるし、またおこるべきだということ。

この書物を読みながら、吉本の強調とはまったく逆に、指示表出に重点をおいて、かれの攻撃をそのまま自己表出主義に転移することも、かれの分析の上にひとしく論理的に成立すると考えることは、たいへん愉快な思考操作であった。自己表出と指示表出とは、それほどに相関的なものであり、なによりかれの最初の図式がそのことをよく示している。(ついでに言えば、言語学者がなにかといえはすぐ図解したがる習性は、私には不可解である。複雑な表現の問題を単純な平面図式で指示しうるならば苦勞はないと思うのである。この著書の多様する図式もつまらぬものが多く、この人までが……と思わざるをえなかつ

た。)

著者の発想が、自己表出と指示表出の不幸な分裂という今日的状況からはじまっていることはよくわかるのだが、本質論的には、両者のディアレクティックな相関性を考えるほかになく、著者の文学史叙述においても、表出性と時代の根源性格をかかわらせるところにおいて、特に説得性と有効性が出てきているのである。

おそらく、多くは承知の上で、著者のパトスがはげしく走っているのだが、ここで、寺田透が、のちにとりあげる本のなかで、「言葉全体の問題を、論争的な態度で、解明してゆけると思ふのは恐らく正しくないのだ。…：相手を倒す快と、無傷の自説を体系的に観衆に受け入れさせる名譽とを、同時に得ようとするのは間違っている。」と述べている、一種の知恵のこぼれが浮かんでくる。

それはともあれ、この理論的労作の示唆するところは小さくない。細部の疑問はかぎりなく、連続する断案の一つ一つにさらに十の検証が必要であり、著者独自の文脈から切りはなして、安心して利用できるような概念など、どこにもないが、この思弁総体が大きな理論的興奮を励起するのであり、理論的衰弱

のいちじるしい今日の批評界・研究界において、この書物の出現の意味は大きいのである。

中村光夫「言葉の芸術」は、一回一回、かなり自由にトピックをひろって書いた、エッセイ風の論述で、以上の著書と同性質のものではない。だが、「文学」を「言葉の芸術」と言いかえることにおいて、ことばの性格から、根源的に文学の本質を説こうとする、吉本との同志向性が見られ、また、近代日本語への関心において、上の両書と共通する。その説くところは、「現実は言葉によって再現できるといふ素朴な信仰」を否定するという、この著者の古くからのモチーフのくりかえしであるが、文学論を言論面にまで拡充して、つぎのように説くところが興味ぶかい。

「明治以来の文学の、最大の實質的成果をもたらし革新である言文一致の運動が、伝統の型にはまった文章を破壊する点では、大きな役割をはたしながら、一方で文章と文飾を混同するやうな感傷的な自然偏重の氣風を醸成し、新しい文章をつくりだす代りに、文章そのものの壊滅を招来してしまったのも、

この大きな荒廃の一面といへませう。」

これを、さきの山本正秀の本の「あとがき」の「いわゆる『言文一致運動』の近代口語文体確立の歴史は、日本近代文学の発達の上で、自然主義文学運動にも劣らない重大性をもつばかりでなく、……」という書きだしとちよつと比較しても、言文一致——自然主義に一つの荒廃を見る者と、單純に進歩を見る者ととの差があざやかである。中村光夫は、言と文との異質性の認識を喪失させたありのまま、主義に今日の文学の荒廃の根源を見すえているわけで、その主張はすでにひどいほどだが、今日の理論に必要なのは、こうした主張をむしろ最下位の常識線とすることであろう。

その上に立って、日本語の近代化の過程をいろいろな角度から論理的に対象化することの必要が感じられる。すべてはこれからである。

寺田透『近代日本のことばと詩』は、評論集で、中村光夫の本より以上に、一貫的な論述ではないのだが、近代日本のことばを考察して、鋭敏で、しかも柔軟な感覚と思考が光っている。

「言葉といふものが無類に柔軟複雑、しかも非実体的で、こんな観察と検討に対して容貌をなじやすく、身をかくしたがる実在は他に類がないからである。」というふかい認識、そこから、「要するに他人の用ひる言葉に対する態度は、寛容に注意深く、長い目で見るといふこと以外にはなく、自分の言葉使用に對しては、厳しい上にも厳しく、潔癖な態度で、注意深く、といふのが言葉に関する公正な唯一の態度だと言つていいやうに僕は思ふ。」という、慎重であると同時に厳しいかまきが生まれている。

こういう著者の、ことばに対する態度は、世のいわゆる保守派とも進歩派ともまったくちがう。権力のことばはいじりに「へそを曲げ」ると同時に、現代日本語の混乱を言いたてたりする者の軽薄を衝き、新標記法のがわに混乱の責めを負わせる見解を排除して、「古いものに対するあさはかな執着」のがわにむしろ滑稽な混乱を指摘する、といった風である。

「『失念と言へば立派な物忘れ』といふ嘲笑を発した庶民の立場が僕の立場である。」と言いつつ、円朝の口演の調子が、二葉亭四迷の散文を「濁らせ、厚ぼったくさせ、精神

の素顔をかくしてゐる」ことを指摘する。こういう、とらわれぬ感受性の動きに、私たちは多くの啓発をうける。この本でことばについて語られているところは決して多くはないが、ほかの論著をもあわせて、この著者は、私たちがことばについて聞くべき感覚と知恵とを最もゆたかにそなえている一人と言つことができらう。

論稿としては、「宮沢賢治の童話の世界」が特に興味をかかったのだが、それは、ここでは別に言う必要のないことである。

この四著を読みあわせつつ、あらためて、ことばの世界の広さ、その抽出と解釈の多様性について思い知らされるところがあるが、それは、ぜひそう思い知らねばならぬことである。その上で、自分の感受性を手はなさず、それを論理化してゆく以外に道のないことを、知るべきではなからうか。

—— 広島大学助教 ——